

# 「学生のおもしろ企画・大学祭企画」実施報告書

※整理番号：1

<b>企画名</b>
新風景の創造～錯覚～ 「MENOPHENOMENON」
<b>実施日</b>
平成 24 年 11 月 3 日（土）～平成 24 年 11 月 4 日（日）
<b>実施場所</b>
広島大学中央図書館前
<b>企画代表者の氏名、所属</b>
氏名：辻川晃太郎 所属：建築学専攻 建築史・意匠学研究室
<b>構成員の氏名</b>
石田正樹、鶴崎翔太、野口翔平、中西美桜、林健太郎、三木僚子、宮本慧、鈴木義弥 江見亮、森貞絵美、真鍋良輔、米井亨、小林大祐、井出優美、畑森翔紀、江川舞、彭飛燕
<b>指導的立場の教員氏名</b>
水田 丞 助教
<b>企画の目的及び内容</b>
<p>講義で習得した設計・意匠・環境・構造の場と捉えて、現代建築の様相からコンセプトを考えて設計を行い、実際に形にすることをしています。そして企画の成果として大学祭の期間中にインスタレーションを行い、訪れる人々に提案したものを体験評価していただいています。</p> <p>本年度は、補色残像効果と遠近法を用いた錯覚空間を設計しました。この 2 つの効果を用いて来場者の方に非日常的な空間を体験してもらいました。</p>
<b>来場者数</b>
486 名
<b>主催・後援団体（外部のコンテスト等に参加する場合は、そのコンテストの規模）</b>
主催：Arch-unit2012
<b>活動の内容（準備、広報活動、当日の様子等）</b>
<p>計画の段階で模型による空間のイメージを固めるだけでなく、実際に今回自分たちが作るものが成功するかどうかを施工する前に実寸大模型でスタディを行うことで可能かどうかの実験も行いました。実寸大でイメージを固めることで当日作るものの完成度を高めていきました。本年度は、予算の関係上、新しく部材を購入し、設計を行うことが困難であったため、昨年度の廃材で利用可能なものを再利用し、設計を行いました。施工期間は、約 2 週間かかり、部材を理学部に運び、そこで簡単な作業を行った後、会場で設営を行いました。施工完了後、実際に空間が成立しているか自分たちでも確認を行い、当日ミスがないように配慮を行いました。内部空間では、多くの電力を必要としていたため、マーメイドカフェさんに依頼し、電気を貸していただきました。</p> <p>広報活動では Facebook 上での宣伝、酒祭りでのフライヤーの配布、大学祭パンフレットへの広告の掲示、中国新聞 CUE 紙面上での宣伝を行いました。</p> <p>当日、午前中は人の流れも少なく、多くの人を呼ぶことは出来ませんでした。人が増えるにつれて、外観の不思議さから人が自然と来るようになり、そこからはこちらから声かけを行わなくても自然と人が来るようになりました。今回の企画では来ていただいた人に補色の空間に滞在してもらう必要がありました。そのため、内部でフライヤー、企画趣旨を説明することで違和感なく滞在してもらえよう心がけました。来場者の中には今回企画した空間の変化に気付けない方もいましたが、多くの方が変化に気づき、驚き何度も確認する方もいました。空間の変化に気付かず、おもしろさが伝わらないのではないかと、不安に思っていたのですが、多くの方に喜んでいただき、今回の企画は成功しました。</p>

## アンケートの結果（来場者にアンケートを実施した場合のみ）

486 名の方に今回の企画を 5 段階で評価していただいた結果

5・・・34.8%、4・・・55.3%、3・・・9.3%、2・・・0.4%、1・・・0%

平均値 4.2

感想より

- ・目の錯覚を利用した非常に面白い仕掛けだった。
- ・こういうものが広場にあるのは、すごくいいと思います。学祭期間外にも何かあるといいですね。
- ・すごいです。来年も面白いことをやってください。
- ・仕組みがわからず、おもしろかったです。
- ・人間は不思議な生き物だと思いました。
- ・建築に興味が一段とわいた。
- ・不思議な体験でとても楽しかったです。
- ・学生さんの説明、誘導が上品!!

## 成果・課題

今回の企画では、2つの空間の変化に気づいてほしいということと自分たちの作るものを専門的で複雑なものではなく、単純な仕組みで一般の方にも楽しんでいただくという2つの目的がありました。どうやったら楽しんでもらえるか試行錯誤した結果、多くの方が2つには気づけないにしても、片方には気づき、その後も一方の変化を伝えると納得され、今回の企画を楽しんでいただけました。しかし、一般の方向けに空間を構成したため、建築の専門の方にとっては、つまらないものであったという言葉いただきました。同時にこちら側の説明不備のため、企画の意図、その後の現象についてよくわからないという言葉もいただきました。

建築を造るのは創造的な行為なため、どこか自己満足で完結し、そこで利用してもらう人の気持ちをないがしろにしてしまうことがあります。今回そのようなことがないように最善を尽くしましたが、それでもまだ努力が足りない部分が見えました。アンケートでいただいた感想を来年度の企画に生かすだけでなく、卒業後就職した後にも生かしていきたいです。

## 実施風景（写真）

